

---

**思い付きで書いてみた。(リリカルなのは×多重クロス)**

九疑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

思い付きで書いてみた。(リリカルなのは×多重クロス)

### 【Nコード】

N7326K

### 【作者名】

九疑

### 【あらすじ】

作者の厨二を種火に、チートとはこういうものか？ と半ば適当に創ってみた作品。需要があったみたいなので続き書こうと思います。時間はかかると思いますが、ので気長にお待ちください。

瞬間移動って素晴らしいと思う(前書き)

英語って難しい。

## 瞬間移動って素晴らしいと思う

『記憶』と『記録』は違うものだ。

『記憶』は人が五感と感情で得る情報のことだと思う。

食事の時、まず視覚で彩りなど、嗅覚で匂いを楽しみ、口に入れた時には味覚で味を、聴覚でサクサクといった音などを、触覚は柔らかさなどを楽しんだりする。感情は五感から得た旨いや不味いなどの情報で一喜一憂する。

個人によつて感じ方は違い、全く同じ『記憶』を共有することなど出来やしない。

「one record/spin start」

だからただ淡々と並べられたこれは、例え同じ名前であっても、外見が全く同じであろうとも、五感と感情の情報がないのであれば、それは決して『記憶』ではなく、僕 日山 奏の『前世』の『記録』ということになる。

脳内を走る四角い枠で区切られた映像の波。その内の一つ、一番古い『記録』が僕の意志に逸って浮き上がり、それ以外の映像は溶けるように消えていく。

浮き上がった映像は高速で再生される。

『一番』の映像は学園都市と呼ばれる超能力を開発する街に捨てられた少年の話だ。

『置き去り』と言われた少年は超能力の開発を受け、同じ『置き去り』達が研究で苦しみながら死んでいくを見て育った。

そして、少年も研究中に死んだ。

研究といってもそれらしいものではなく、ただの実力試験みたい

なものだった。白い髪に白い肌、餓えた獣のような赤い眼の少年の能力を測る為に戦わされた。

戦いは一方的なものだった。

白髪の少年に触れただけで、腕が間近で爆発を浴びたかのように消え去り、虫でも払うかのように振られた拳が当たった胸は肉が弾けた。こういうのが悪夢というのだろうか、と不思議と冷静に思う。

そして、開始数秒の戦いとも呼べない戦いは少年の死で終わり、映像もそこで途切れることになる。

「『空間移動・大能力者』日山 奏」

終わると共に粒子へと霧散した映像は、やがて円盤形のディスクへと形を収束し、回転を始め『僕』に情報を詰め込んでいく。

「再現」

瞬間、僕の視界は一瞬にして切り替わり、すぐ目の前にいた黒猫を腕に抱きしめ、再び数メートル先の人がない路地裏へ『移動』した。

一秒にも満たないことだったので、誰にも見られてはいないだろう。車の運転手には見られたかもしれないが、すぐに忘れるだろうから、よし。

「終了」

着地。

腕の中で黒猫がにゃーと一鳴き。少し力を抜くと華麗な動きで地面に降り、そのままこちらに構うことなく走り去っていった。

気をつけて生きろー、と何と無く呼び掛けるも、当たり前なことに返答はなし。漫画みたいにはいかないか。こういう時は妙に人に

慣れていて懐かれるもんだと思ったけど。

まあ猫だししょうがないか、とため息。家に帰る為に歩き出す。

路地裏を出ると、何人かの通行人の目がこちらに向いて、次の瞬間には興味を失ったといった感じで外されていく。路地裏から小学生が出てくるのは珍しいのだろうか。珍しいのだろうか、注意を向けるくらいには。

無駄なことに思考を割りながら、帰り道を歩く。良いことをした後には気分がいいものだ。足取りが軽くなる。たまには自分の能力も役立つもんだと思いつながら、僕は上機嫌で肩を揺らしながら、夕日に染まりつつある歩道を踏みしめて笑った。

「……………あれは」

故に彼は気づかなかった。

日山 奏の後方。ちょうど路地裏に見える入口近く。先ほどの黒猫を抱き上げながら、驚愕に表情を染める少女がその後ろ姿が見えなくなるまで眺めていたことを。

「日山、くん？」

少女 月村すずかは、ほぼ毎日見ているクラスメイトの名前を信じたくない思いで小さく呟いた。

光の円盤が回転する。『一番』から『九番』と銘づけられた九枚の円盤はそれぞれ全く別の映像を写し出す。

男、女、合わせて九人。似たような世界でありながら全く別な世界で生きたそれぞれの一生を、九つの円盤は高速で写し出していく。それらの全ては、『十番』の彼からすれば、何かしら異常な力を持っていた。

- 『一番』は空間を移動する術。
- 『二番』は闘志に変身する力。
- 『三番』は優秀な改造人間の遺伝子。
- 『四番』は魔を断つ剣の奥義。
- 『五番』は存在を喰らう徒の牙。
- 『六番』は身体に刻む紋章の術。
- 『七番』は愛する者を生け贄にした罪人の紋章。
- 『八番』は情報を改変する騎士の脳と剣。
- 『九番』は竜という最強の肉体と魔力。

番号が上に行くにつれ、振るう力は強くなり、九番にもなると街一つ滅ぼすのだって1日あれば十分だ。

あまりにも異常な力。それが『十番』の彼には恐ろしいものと映ると共に、羨ましくも思えていた。何故ならば、その『十番』の世界では異常な力が、それぞれの世界では普通とはいわないまでも、一部の者には認識され理解されていたからだ。それに同じ力を持つ存在が、どの世界にも多数存在していた。知る限り自分以外は普通な世界に生きる『十番』には、例え死がそこらに転がっている世界であつても、仲間がいるということは眩しいものに見えたのだ。

同じなのに、と妬む心はどうしようもない。

性別も、種族も、たまには名前も違うが、彼ら九つの魂は自分と同じ起源の筈なのにどうしてこうも違うのか。

常は隠しながらも僻み、憧れ、寂しがり、渴望しながら生きる『十番』の名は人間・日山 奏。

九人前までの前世を『記録』として知ることができ、その力の影を纏うことで、能力を再現することを可能とする能力の持ち主である。

目が覚める。

窓から差し込む日光が目にし込み思わず顔をしかめた。そのまま暖かいベッドの中に籠りたくなる気持ちを抑えて、のそのそと這



いずるように、床に降りていく。

寝惚けたまま部屋を出て、リビングに入る。テーブルの上にサラソラップを張った朝食に、弁当箱。メモとして残された紙に書かれた「おはようカナちゃん。ご飯は暖めて食べてね」と、いつも通りの母からのメッセージ。相手はいないけれどもおはようと笑って電子レンジでオカズを暖める。

暖めている間に洗面台で顔を洗い、寝癖を整える。日々の習慣は恐らく五分ぐらいで終了し、リビングへ戻って暖め終わったオカズを取りだし、ご飯を盛り付け手を合わせていただきます。

味噌汁を飲みながら時間を見ると七時。これならゆっくりして中間に合うなと思いつつ、今日も朝早くご苦労様と看護師の母親に心中で感謝を込めて労った。と同時に、本人の前で口に出して、たちまち抱き締められることを思い出した。少し気落ちしながら、食べ終えた食器を片付ける。

流して食器を洗い終えたら、弁当箱を包んで部屋に戻り、制服へと着替える。僕が通う聖陽大付属小学校は制服着用が義務。珍しいと毎度思うのは僕が『記録』持ちだからか。そんなどうでもいいことに気をとられる。まあ、考えてもしょうがないとすぐに忘れるのだが。

着替え終えたら鞆に教材と弁当箱を入れ、準備完了。窓の戸締まり、ガスの元栓を確認し、行ってきますと鍵を閉め家を出る。マンションのエレベーターに乗り一階まで降りて玄関前を掃除している管理人さんと挨拶。いつてらっしゃいの声を背に、バス停へと駆け足て向かった。

なんてことはない普通なこれが、僕の朝の大切な日常である。

「おはよー」

クラスメイトが「あ、おはよー日山君」と返してくれたことに微笑みながら席につく。そして、鞆から教科書を机に閉まっていると、一人の男子が僕の机に腰掛けた。友人の洲崎だ。

「おはようカナちゃん。今日も可愛いな」

洲崎は笑いながら、けれどマジな目でそう言った。

僕は洲崎の脇腹に手を突き刺すことでそれに答えた。言葉にすれば「黙れ」である。洲崎は痛みに悶絶し、机から落ちた。

「おはよう洲崎。君は今日も変態だな」

「可愛すぎるカナちゃんがいけないんだ。ああ、それにその目ゾクゾクすグルブウツ!!」

僕が冷ややかな気持ちで視線を向けると、爛々と目を輝せたので、気味悪くなって腹を踏みつけた。周囲はまーたやっってるってな感じに呆れながらも無視。悲しいことにこのやり取りは毎朝恒例の行事だったりする。

「僕は男だと何度も言っているだろ。三年来の付き合いなんだし」

呆れながら僕が言うと、何事もなかったかのように洲崎は立ち上

がった。

「それでも俺がカナちゃんに抱く情欲は変わら！」

喉に抜き手。洲崎が噎せながらボディランゲージでごめんなさいと謝ってくる。流石に喉はやばかったようだ。てか、情欲っていうな、情欲って。相手が女性なら平手打ちされるぞ。君、本当に小学生か。

「はあ…いつから君はそうなったんだか。昔はもつとまともだったろう。少なくとも…女の子を好きになるくらいには…？」

言いながらもクエスチョンを浮かべてしまう。そういえば、ちゃんと口にして誰々が好きとか聞いたことがない気がする。気づけば今のような状態になってたし。…まさか、元から本当に本物の変態だったのか、洲崎は。

愕然としながら洲崎をみると、何を言ってるんだってな感じに僕を見てた。やべえ、こいつマジモンの変態だ。少しは冗談だと思っていたのに。

「…すまない洲崎。僕は今更だが真実に気づいた。君と友人を続けるのは不可能な気がする」

「そりゃ、いつかは恋人になるからな。いつまでも友人つてのは駄目でしょ、駄目」

「やっぱりマジなのかキミは！？　ち、近寄るな！変態が移るといっつか感染する」

「何だよカナちゃん。そんな邪険にすることないじゃないか」

ズザザー！と後ずさる僕。何故か両手を広げて迫る洲崎。

ハアアア　！とか言いながら上から下へ動く腕の動きが、何故

か異様にキモチワルイ。

「大丈夫だカナちゃん。洲崎×日山とか既に認められている部分もあるんだから」

「なんだ！なんだ『×』って！！よく解らないけど凄い鳥肌立ってるんだが！？　というか何で顔を赤らめつつ期待に満ちた目をしてるんだその女子数名！！キヤー！！ってどうして悲鳴！？　僕がキヤー！だよくそ！！」

「嗚呼、いいなカナちゃんの悲鳴…とつても興奮する。　ゾクゾクして、き、たあ！！」

「キモツ！ていつかなぜチャックに手をかける？　やめる！なにをする気だキミは！！」

「ハアアアア　！！」

「い、いやっ…：…なんか知らんけど誰か助けてえ！！」

「…：…なにやってんのよあんた達」

呆れたような声に振り向くと、声通りに呆れた表情をした女神がいた。

「た、助けてくれバニングス！奴の変態がリミットブレイクなんだ！！」

「全然意味分かんないわよ」

「ふふ、貴様がバニングス。いかな『くぎゅう』と言えど今の俺は止められないぞお！！」

「毎回言ってるけど『くぎゅう』ってなんなのよ『くぎゅう』って！！」

そう言ったバニングスは、洲崎に気づいて顔をしかめた。そして僕を見て何か納得が言ったような表情をし、近くの机の上にあった筆箱をとり、今、正にチャックを全解放しようとした洲崎に向けて、

「なに汚いもん出そうとしてんのよ　っ！」

全力で投げた。

「ホブウツ!？」

投げられた筆箱は洲崎に突き刺さる。その瞬間、成り行きを見ていた男子全員がうわあって表情をしながら腰を引いた。ああ、あれは痛い、なんて思いながら僕は安堵の息を吐く。洲崎はある一部分を押さえながら前のめりに倒れていた。

「…すまない。助かったバニングス」

「別にいいわよ。あんたも大変ね日山。それとおはよう」

「ああ、おはよう。高町と月村もおはよう」

「う、うん。おはよう日山くん」

「……おはよう」

バニングスの後ろにいた二人に気付き声をかけると高町は苦笑気味に、月村はどこか戸惑った感じで返してきた。まあ、あんな変なの朝っぱらから見れば戸惑いもするか。申し訳ない気持ちでいっぱいである。

その後、自分の席に向かった三人と別れ、今尚倒れ付した洲崎とどこか悲しそうな顔をして筆箱を持つ男子を見ながら、僕はHRまでの時間を潰した。

## 瞬間移動って素晴らしいと思う(後書き)

ちなみに作者の高校時代で取った英語の最高点数は39点です。赤点ボーダーは40点なりです。

テンプレート(前書き)

こんな小学生はいない

## テンプレート

「カナちゃん。一緒にご飯食べよう」

「近寄るなウジ虫」

昼休みである。

授業終了と同時に近寄ってきた洲崎は回し蹴りにて退治。朝の一件以来、僕の洲崎に対する評価はドン底にまで下がっている。この位では数分気絶するだけなので、良心も痛まない。

弁当箱を持って僕は教室を出た。その際にクラスメイトに聞こえるように今日は外で食べようかなと呟いておく。これで洲崎は外に出るはずだ。内心、ほくそ笑みながら僕は真っ直ぐ屋上へと向かった。

屋上のベンチは、既に昼食を取りにきた生徒で埋まっていた。洲崎とのやり取りに時間を掛けすぎたか。仕方ない、と思いながら僕は適当に邪魔になりそうにない場所で、鉄柵に背を預け地べたに座った。

胡座をかいて弁当箱を開く。看護師という職業柄なのか、母さんの料理は毎度よくバランスが考えられている。まあ、僕がみて分かるのは彩りぐらいだけ。きつと栄養とかも考えてくれているんだろうな、と病院で働く母さんに感謝する。

手を合わせ、いただきます。

モグモグと咀嚼する。うん、美味しい。といつも通りの感想を心中で述べていると、後ろから声。

「かつナちゅわーん！どこにいるんだー」

「！！」

ガンツと鉄柵に後頭部をぶつけてしまったのは僕のせいではない



と思う。

痛む頭を押さえながら、鉄柵越しに下を覗く。遠くてよく分からないが、首を左右に振りながら爆走しているアレが洲崎だろう。僕は思わず呻いた。どうしよう、本当に縁を切った方がいいのだろうか奴とは。

「……………ほんと、あんたも大変ね」

「ああ、全くだ。……………ってバニングス？」

振り向くと憐れんだ目で僕を見るバニングスと今朝と同じ表情をした高町と月村がいた。やめてくれ、僕をそんな目で見ないでくれ。悲しくなる。

「あんた、屋上で食べてたの？ 今まで気づかなかったわ」

「いや、いつもは教室で食べているんだけどね。今日は…ほら」

「……………ああ」

「あはは…」

「が、頑張っつてね日山くん」

僕の言葉に納得した表情をする三人。バニングスに「いつかいいことあるわよ」なんて肩を軽く叩かれながら、励ましてくれた高町にお礼を言う。クラスメイトの優しさが身に染みた。

「そういう君達はいつも屋上で食べているのか？ 確かに教室にはいなかった気がするけど」

「まあね。雨の日は流石に教室だけど」

そりゃそうだ、と言いながら弁当箱の蓋を閉め片付け始める。三人娘が不思議そうな顔をした。

「日山くん、もう食べ終わったの？」

「いや、ただただけだね。けれど洲崎が外に行つたから、屋上にいる必要もないと思つて、教室で食べよう」と

「なんでよ？ そんな面倒なことしないで一緒に食べてけばいいじゃない」

サラツとそんなことをいうバニングス嬢。お邪魔になるかな？

と思つた故の僕なりの配慮だつただけ。女の輪の中に男が入るのもどうかと思つし。

そんなことを伝えてみると、別に気にしないとの返答。というか外見だけなら女四人よ、とバニングスに言われた僕は反論する気も失せて大人しく従うであつた。

「……日山くんのお弁当、野菜が無いね」

「いや、野菜は先に食べたんだ。肉より野菜が好きだから、僕は「あ、なるほど」

でもなんか見た目通りね女の子っぽい、黙れバニングス。

僕の弁当箱を覗きながら、(僕的に)暴言を吐いたバニングス。なんだ、見た目が男っぽくないのがそんなにいけないことかよ。

「いけない、というか……」

「日山くんて、こつ、線が細いし……」

「名前も奏つて女の子っぽいし……」

「髪も男の子にしては長いし……」

「あだ名はカナちゃんだし……」

「運動会に来てた美人のお母さんとそっくりだったし……」

「年の離れた姉妹つて言つても通用したよね……」

「笑顔可愛いしね……」

「朝の悲鳴なんて女の子っぽかつたしね……」

「洲崎くんと並んで歩いているとパツと見た感じカップルだよね…」

「母さん助けて！クラスの女の子が僕を苛める…！」

バニングスから始まった日山 奏評価は、僕のプライドをスタズ  
タに切り裂いた後、火にかけるぐらいの威力があった。外見がコン  
プレックスの僕に対してなんて仕打ち。特に月村。洲崎とカップル  
とか悪夢みたいなことを言わないでくれ。

「ま、まあ、あと何年かすれば日山くんも男っぽくなるよきつと」

月村のフォロー。けれど本当にそうかな…？ 僕、写真で見た父  
さんとは似ても似つかないのだけど。完璧に母さん似なんだけど。

「……まあそれでも希望にはなるか。ありがとう月村。変声期目指  
して頑張ってみるよ」

「なにを頑張るっていうのよ」

「にゃはは…」

そんな会話をしつつ、減っていく弁当の中身。先に食べはじめて  
いた僕が食べ終わり、ごちそうさまでした、と言って弁当箱を片付  
ける。

「それじゃ、僕は一足先に戻るよ」

「別にそんな急がなくてもいいじゃない」

「いや、洲崎の奴が教室に戻ってるかもしれないからね。外を探し  
終わって教室にいなかったらここにくるかもしれないし」

流石に奴がいると弁当も落ち着いて食べれないだろうと思いが

ら言つと、納得したのかあつさり引き下がった。流石の三人も洲崎は苦手のようである。高町なんかは『魔王様』とか言われたことがあるしな。しょうがない。

「あ、日山くん待って」

んじゃ教室で、と立ち上がって歩こうとすると月村の呼び止める声。足を止めて振り向いた。

「なに？」

「あ、うん。大したことじゃないんだけど、……」

そう月村は言いにくそうに言葉を濁らせる。なにかを迷っているようにも見えるのだが、なんだろうか？ 他の二人に目を向けても、二人とも分からないようだった。

「……うん、やっぱりなんでもない。ごめんね、呼び止めたりして」

「いや、別に構わないけど……」

結局、理由は解らず仕舞いだった。なんだったんだろうと気にしながら屋上を出る。

閉まりきる前の扉からは、疑問を含んだバニングスの声が聞こえた。たぶん、さっきのことを聞いているのだろう。後でバニングスに聞くのもいいかもしれない、と思いながら教室に戻った。

朝の一件で何かが振り切れたのか、妙に気持ち悪い洲崎を全力で追い払いながら迎えた帰りのHR。妙に疲れた。なんかもう帰って寝たい。

けどそうもいかないのが、母子家庭の辛いところ。夜遅くまで働いている母さんになんか変わって僕が買い物に行くのだ。

制服を来たままスーパーに立ち寄り買い物をしていく。買い物を終え、どっさり二袋文の重さを腕に感じながら溜め息をつく。慣れたとはいえ、やっぱり重いものは重い。今度は小まめに買いに行くか。

袋を引き摺らないように気を付けながら歩く。ふと、甘い匂いが鼻腔を擦った。そういえば翠屋があったな、と親子共々鼻負にしている菓子屋を思い出して、少し考えた末に足をそちらに向けた。晩飯にデザートがあってもいいだろう。母さんも喜ぶ。

翠屋に到着。持ち帰るつもりなので中には入らない。シュークリーム値段を確認。金額的に問題はない。店員を呼ぶことにした。

「すいませーん！」

「はい！今行きまーす！」

店頭に出てきたのは知っている人だった。

「あら、奏くん。いらっしやいませ。また買いにきてくれたの？」

「母さんも僕も翠屋のファンですから。シュークリーム二つお願い

します、桃子さん」

クラスメイトの高町の母親である高町 桃子さんは、僕の言葉に嬉しそうに笑った。

母さんもだけど、この人達は本当に母親かと疑う程若い。鳴海の美人は年を取らないのだろうか。最近、本当に気になる。

「シュークリーム二つで三百円になります」

「三百円……っと」

「はい、ちょうどいただきました。領収書はいる？」

「あ、はい。家計をつけなきゃいけないので」

「それじゃ……はい、どうぞ。気をつけて帰ってね」

「はい。桃子さんもお仕事がんばってください」

一礼して夕焼けに染まりつつある歩道を歩く。今度は中に入るのもいいか。ちなみに高町は僕が翠屋の常連だと知らない。なぜか毎度すれ違いが起きるからだ。僕が中に入ることが少ないのもあるが、まあいいか、とすぐにそのことは忘れて、そろそろ痛くなりはじめた両腕に意識を向ける。歩いて残り二十分くらいか。能力を使おうか悩む。

能力を使う際のデメリットはまるでない。疲れるだけだ。その疲労が酷いのだが、使えば家まで楽々と帰れるだろう。

そんなことをうーんと悩んでいると、クラクシヨンの音が鳴り響く。思わず振り向くと、どう見ても高級車みたいなのがこちらに迫ってきていた。

え？ なに？ ヤクザ？ と黒い高級車「ヤクザ」と認識している僕の目の前で車が停車。ウィーンと後部座席の窓が開く。金髪インテール登場。僕の困惑は最高潮に達した。

「……バニングス。ヤクザ……いや、マフィアの娘さんだったのか、

君

「たまにぶっ飛んだことを言うわよね、あんた」

そして、死にたい？ ごめんなさい。

どうやらマフィアでは無かったようで。でもその眼光は十分役を果たせると思う。

「と、月村？ 君もいたのか？」

「う、うん。家まで送って貰ってるの」

そう控えめに告げる月村と目付き鋭いバニングスを見比べる。

「……これ、月村の車じゃなくて？」

「何が言いたいよあんたは」

「や……月村の方がお嬢様ぽいよなあ……と。バニングスは、ほら、なんていうか……女王様？」

独裁政治の、と続けて言うとドアが開いてバニングスがドロップキックをしてきた。おいおい、仮にもお嬢様だろバニングスよ。

内心そんな突っ込みをしながら、避けるとバニングス怪我するよなあと思い、甘んじて受けてクッションになろうと考えて、首に衝撃。顔を狙うのではないだろと思いながら、一瞬見えた白いのを『記録』して、僕は気を失った。

来たぜ、意味不展開（前書き）

どうしてこうなったのか私にも分かりませぬ



## 来たぜ、意味不展開

目覚めると、手足を縛られて廃ビルみたいな所に寝かされておりました。

え？ なにこれ？ 現状の把握が出来ない。確か僕はバニングスをからかった末にドロップキックを食らって気絶した筈なんだが。なんでこんな人気の無い場所で手足を縛られなければいκανのだ。

試しに縄をほどけるか試してみる。一秒で無理だと判断。能力を使えば何とでもなるけど、素のままだと絶対に無理。小学生相手にこんなキツイ縛り方するなよ、アザになるじゃないか。

まあ、今は様子を見よう。なんか雰囲気悪いし。前方五メートルちょいに数人いるけど、どう見ても堅気の人では無いしね。

目を凝らしてみる。堅気じゃない人は大人の男性が五人。今のところは僕が目覚めたことに気づいていない。

目を閉じて、気絶の振りをする。耳に意識を集中すると、話し声が聞こえてきた。男達以外にも誰かいるらしいが、話し掛けられている方は口を塞がれているのか言葉を成していない。獣の呻き声のような感じだ。まあ、声の感じからして僕と年代の女の子で、気絶する前のことを考えると話し掛けられているのはバニングスか月村、あるいはその両方ということだろう。だとするとこれは誘拐だろうか。どうして僕まで捕まっているのかは分からないが、バニングスか月村を拐った以上、金持ち狙いの誘拐だろう。…とぼつちりじゃないのか、僕。

「それにしても運が無かったな嬢ちゃん。ターゲットと同じ車に乗っているなんて」

「顔を見られている可能性があるから、見逃す訳にもいかなかったしな」

男達の会話を聞いてみると、どうやら金目的の犯行ではないらしい。ターゲットとやらが誰かは知らないが、『車』と言っていた以上、あの時車内にいたバニングス、月村、運転手の誰かか。運転手は何となく無さそうなんで残るはバニングスと月村の二人。ということ、そこにいるのはどちらか片方が。

「それよりさっさとヤっちまおうぜ。時間ねえんだろ？」

「そっぴやそうだな。最後には殺さなきゃいけないんだから、やることやっとか。おい、そっちの転がってるのも連れてこい」

男達の会話の意味を僕は分からなかったが、『記録』を調べるとスグに何をしようとしているか分かった。

『記録』の中の何人かは、それを行われた者達に会ったことがあるらしい。その全てが絶望とトラウマを植え付けられ、笑顔と幸せを奪われている。『記録』は映像と文章でしか僕に伝えないが、それで十分。その行為が最低最悪なモノだと瞬時に理解する。

イヤらしく笑うその顔を見て、殺意が宿った。

「 set . four record / spin start 」

僕はヒトだ。誰がなんと言おうとヒトであると胸を張る。そのヒトだという感情が、目の前の行為を許すなと告げる。日山 奏は目の前の行為を拒絶する。

何処か遠くで円盤が回る。一人の女性の一生が情報として僕に流れってくる。

物心つく時から修練を重ねた。

自分の使命として幾度の傷を負っても諦めなかった。

最後まで誇りを持ち、名を汚さず生きた。

それは、魔を断つ剣。

戦争で多くの首級を上げ、されど幼き半人半幼の娘を残して死んだ女の一生。

「『神鳴流剣士』桜咲 奏」

身体に活力が湧く。この世界にはない『気』という概念が、自分を中心に発生していくを感じる。

腕が、足が、目に至るまで全てを武器とする技術が自分に流れ込む。気の奔流で髪が揺らめく。縄がギチギチと裂けていく。

「それじゃ頂くとするか。小学生つてのがちょっと残念だけど」

「というか鬼畜だわお前。あ、猿轡外す？」

「外せ、外せ。煩いからつけたけど、ここからは泣き叫んでもらわないと」

「やっぱ鬼畜だわ」

笑う男達の手が伸びる。

金色の髪が一房視界に入った。

「い、いや…助けて…誰か助けてえっつっ!!」

戸惑うことなく、人前で力を振るった。

「再ッ、現 …!!」

ドンッ！と轟音が響く。

今まさに触れようとしていた男の体が、九の字に曲がり水平に吹っ飛んでいく。男はそのまま壁に激突し、力を失い倒れた。

僕は拳を握る。隠していた能力を使う。怖がれなくなかったから隠していた力を振るう。構わない。ここで使わなければ、僕は一生

後悔すると思うから。

呆ける残りの男に目を向ける。『記録』に従い構えを取って、冷やかな声で告げた。

「容赦はしない。死なないように祈れ」

アリサ・バニングスは目の前の光景が現実だとは思えなかった。まるで、良くできたアクション映画を見ているよう。

人がコマのように回転しながら吹き飛ぶ。大人の男性が、子供の細腕に殴られただけで地面と水平に飛んでいく。地面を踏み締めれば粉々に碎け散り、瞬きの間にその姿は何メートルも離れた位置に現れる。

男達は僅か数秒で、何も出来ずに意識を刈り取られていった。

「 屑が」

異常な現象を起こした少年が吐き捨てるように憎々しげに呟いた。少年がアリサに振り向く。思わず縛られたままの足を動かして遠ざかろうとした。少年の表情が一瞬、歪む。けれど、すぐに表情を無表情にし、アリサに近づく。

「…怖いと思うけど、今は我慢してくれ」

「あ……」

アリサの前で膝を着き、縄を断ち切りながら彼はそう言った。その声が、その表情が、アリサには泣き出す寸前の子供のように感じた。

アリサを縄から解放すると、ゆっくりと立ち上がる。そして、周りを見渡した。

「……月村はどこだ、バニングス」

「え、あ……う、上に」

連れて行かれた、とアリサが続けるより早く彼の手が額に触れた。先程の光景を思い出してビクツと震える。そして、次の瞬間身体に衝撃が走ると共にアリサの意識が薄くなっていく。

「……やっぱり怖がるか」

彼が何かした、と気づいた時には既に遅く、奏の弦きを最後にアリサは気絶した。

バニングスを気絶させ、倒れた男の一人から携帯を拝借し、警察に通報する。バニングスは入り口辺りに寝かせて、男達はそこらに転がっていた縄で縛り上げた。

周りを見渡す。まるで竜巻に直撃したかのように荒れまくった室内をみて溜め息。どうしよう、やり過ぎた。これが、怒りに我を忘れたってやつだろうか。

まあ、そんなことは今はいい。いや、ぶっちゃけバニングスにバシたことは良くないけど、そのことは今考えてもしようがない。

「上か。昇っていくしかないよな」

階段は一般的なUの字の階段だった。僕は気を纏ったまま跳ぶ。段差にはまるで足をつけずに、一足で踊り場の階段の壁に足をつけ、直角に、上から見ればVの字になる形で跳び、二足で二階に着く。人の気配は無かったので同じ要領で三階へ。

見張りが一人。目が合った。武骨な手に握る鞘から刃が飛び出る。

「お前は」

「斬空掌！」

『四番』の技を使って先制攻撃。瞬動という移動術を用いた顎への超近接攻撃は相手の意識を一瞬で刈り取ることに成功した。ふう、と安堵する。刃物持つてるとか聞いてないぞオイ。

気絶した男の手から奪い取る。大体、自分の身長ぐらいの長さの刀。平和なこの時代に侍の武器を持ち出すとか、相手は何者だ。考え付くのがヤクザしかないんだけど。

タラリ、と流れる汗を拭う。大丈夫。今の僕は歴戦の剣士。だから大丈夫。たぶん避けられる。

「でも下手すりゃ死ぬよな」

投げ遣り気味に呟いて刀を持ったまま移動。この調子だと誘拐犯は拳銃すら持つている可能性がある。『四番』の『記録』は余裕满满だが、小学三年生の僕には無手では心許ない。怖いんだ。文句あるか。

四階へ跳ぶ。人の気配はない。

ほう、と一息吐き、もう一度階段へ。五階に跳ぼうと力を込め、

「ッ！」

殺気。

一足で飛び退き、刀を構える。相手は暗闇の中から飛び出してきた。微かな光りに反射する剣閃。狙いは心臓。刀で弾き、身を屈める。頭スレスレを通る刃。相手は二刀流だと気づく。この距離では分が悪い。崩れた体勢から斬り上げ。二刀を交差し受け止められるも、構わず力を入れ弾き飛ばす。

稼げた距離は三メートル。どうやら後ろに飛んで勢いを殺したらしい。けれど、それで十分。刀を腰ために構え、『四番』の技を使わせてもらう。

「斬空剣！」

斬撃が文字通り『飛ぶ』。三日月型の斬撃は障害物を物ともせず二刀流に迫る。

気配で二刀流が驚愕していることを感じとる。そりゃ飛ぶ斬撃なんて見れば驚く。どうでもいいけど本当に化け物だな、僕の前世。

「舐めるなッ！」

いや、結構本気なんです。何に対する舐めるなだそれは。そう思考しながらも油断なく構える僕の前で、二刀流の動きは突如『加速』した。

瞬動を用いたかのような爆発的な加速。身を屈めて獣のように走り、斬撃を交わした二刀流は、僕へと一直線に迫る。

驚愕しつつも瞬動。同じ速度で迫る僕の姿に、またもや二刀流が驚愕したのを感じるが、知るか。驚いてるのはこっちだって同じだ。僕が無いと思っただけで、実は気とかあるのか、この世界。

「疾　ッ！」

「ハアッ！」

超高速で激突する刃。衝撃で吹き飛びそうになるのを、踏ん張ることで堪え、二刀流とのつばぜり合いに持ち込む。

ギリギリと拮抗する。ここで負けた方が死ぬと思いつつ、上にある二刀流の顔を睨む。二刀流も見下ろすように睨み、視線が合った。

「……………え？」

「キミは……………」

揃って間拔けな声。拮抗していた刀はどちらからともなく離れ、同時に困惑した声で、相手を呼んだ。

「恭也……………さん？」

「奏くん、か？」

これはどうということだろう。

段々意味が分からなくなってきた事態に僕は頭を抱えた。



来たぜ、意味不展開（後書き）

とりあえずなのはの出番は当分無いことだけは確定事項なのですよ

神鳴る剣とか厨二すぎると今更ながらに思います（前書き）

あまり目立たない残光閃。けど私は好きなんです。

## 神鳴る剣とか厨二すぎると今更ながらに思います

「はあ…つまり、僕は月村のお家騒動に巻き込まれたと。そういうことですか？」

「…分かりやすく言えばそうなる」

恭也さんから説明を受けた僕がそう言うと、辺りを警戒しながら恭也さんは頷いた。

ちなみに、恭也さんは、高町の年の離れたお兄さんだ。恭也さんとは翠屋関係で付き合いがある。ぶっちゃけると高町より長いんじゃないだろうか。どうでもいいけど。

それで今はお互いの事情説明。僕の気づいたら捕まっていた、という発言には恭也さんは始め信用していなかったが、気を失う前の経緯を話すと、気絶した僕を家に送ろうとしたのではないかと推測された。まあ、それなら僕も一緒に捕まっていたことに説明がつく。恭也さんの話では車を事故らせて誘拐したらしいし。

んで、恭也さんと言うと、月村のお姉さんから連絡を受け、捜索していたからだとのこと。婚約者らしい。今どき婚約者なんているんだね。無駄なことを考える。

それで、恭也さんがこの廃ビルが怪しいと思い覗いてみると、そこには誘拐された筈のバニングスが気絶していて、誘拐犯と思われる男達がボロボロの姿で縄に縛られていた、と。

僕を襲った理由は、怪しかったから。なんだそりゃ、と思うも刀を片手に持ちながら佇む小学生というのは確かに怪しいな、と思わず。でも小学生に真剣むける根性は流石にどうかと。

「というか、バニングスが誰かに助けられてる時点で、僕がそうだと思わなかったんですか？」

「一階の状態を見たら警戒するのは当然だと思うぞ？ それに、君

みみたいな子供がこれほどの武芸者だとも思わなかったしな。最初は奴らの仲間かと思った」

まあ、確かに一階のあれは爆発物でも使った後のようだったし、それにこんな異常な子供は実際はいないけど、誘拐犯の仲間っていうのは酷すぎではなかるうか。そこんところを聞いてみると、

「いや、そういう意味ではなかったんだが…」

曖昧な返事が帰ってきた。まあ言いづらいのも分かる。刀もつてりや加害者側と誤解するのもしようがない。それでもショックだったが。

「ま、そんなことはさておき、今は月村のことです」

僕の言葉に恭也さんの表情が引き締まる。これが武人の顔ってやつか。『記録』で見知ってはいたけど、やはりそれとは違う。なんか威圧感みたいなものがある。

「？ どうした？」

「い、いえ、なんでもありません」

まさか怖かったなんて面と向かって言える訳がない。気を取り直して話を進める。

「気絶する前にバニングスが言っていたんですが、月村は上に連れて行かれた、と。それで恭也さんに聞きたいんですが、外から見た感じここは何階までありましたか？」

「六階、だな。間違いない」

恭也さんの言葉を信じるのならば後二階。そのどちらかに月村はいる。

「それじゃ手分けして捜しますか。僕が五階。恭也さんが六階に」

僕がそう提案すると、恭也さんは難色を示した。

「なんか不味かったですか？」

「いや……そういう訳じゃない。ただ、君も行くのか？」

「そりゃ行きますけど……」

「……俺は正直に言えばアリサちゃんの所に戻っていてほしいんだが」

「時間がないでしょ。二人で捜す方が早い」

バニングスを助けてから、恐らく五分前後。既に、なにかさかれている可能性もある。本当はこんな所で話をしている暇なんかはない。

「正直に言えば僕だってこんな厄介ごと勘弁なんですけどね。……けれど、クラスメイトが酷い目に遭いそうなのに黙っているなんて出来ません。ていうか出来なかった。それに長年隠してきた秘密もバレちゃったんで、この際に大暴れしようかな、と」

「……分かった。君の言う通りにしよう。その代わり、無理はするな。危険な時は即座に退け」

最後は笑いながら言うと、恭也さんは溜め息を吐きながら了承してくれた。僕が意地でも引かないことを感じ取ったのかもしれない。恭也さんの言葉に頷く。すると、恭也さんは「ああ、それと」と言いながら指を差した。

「ソレについては、後で説明してもらおうぞ?」

恭也さんが指差したのは、刀。どうして刀を持っているかは事情説明の時に話しているので、ソレとはこの剣術のことだろう。まあ気にならない方がおかしい。

僕は曖昧に頷いた。どうにかして誤魔化そう。

「それじゃ、俺は六階」

「僕は五階で」

互いに頷きあつて、同時に階段へ。今までと同じくVの字のように三角飛びをしたら、恭也さんのびっくり顔。あ、またやっちゃまった、と思いながら僕はヤケクソ気味に五階に突進した。

五階に突入した小さな後ろ姿を見届けて、恭也は六階に進みながら思う。

あの少年はいったい何なのだろうと。

恭也が奏と出会ったのは、恐らく妹のなのはより前のこと。奏が翠屋に立ち寄った時、客と店員として会った。

第一印象は男物の服を着た女の子だった。両手に買い物袋を引っ提げ、舌つたらずな声で注文をする姿は微笑ましいどころの話ではなかった。桃子なんかは「お母さんは？」と心配しつつも抱き締めたくて仕方がない様子だった。その際に母子家庭であることを知り、

仕事で忙しい母の為に自主的に手伝いをしていることを聞いて……我慢の限界だったのだろう。桃子が抱き締めてしまったのはしょうがないといえる。

それから、翠屋で少し話す程度だったが一番下の妹と同年代ということで多少なりとも意識していたのだろう。三年近い年月を付き合ってきた。

その記憶の中の少年と、先程の少年がどうしても重ならない。

鋭い剣閃。重い斬撃。一瞬で数メートルを走破する移動術。こちらの刀を悉くかわす身のこなし。そして、斬撃が飛ぶなどという摩訶不思議な技。

外見から、ついちゃん付けをされて不貞腐れていた少年の面影はどこにも無かった。あったのは圧倒的な闘気。歴戦の達人の気配を出す剣士の姿だった。

年齢一桁。自分の半分しか生きていない子供が、自分と同程度、もしくは上の腕前を持っている。これは才能なんて言葉では片付けられない。異常である。今までそんな気配が全く感じられなかったことを考えると特に。

「……考えても仕方がないことが」

六階に到達する。

見張りはいない。五階に集められているのか。思案するも、すぐに気配を感じて忘れ去る。

気配は二つ。六階フロアの一番奥の部屋に。息を潜めて接近。扉越しに声が聴こえた。一人は捜し人のすすかの声。もう一人、聴いたことはない数人の男の声。数は三。

壁越しに感じられる“普通ではない気配”に、ああ、予想通りだ、  
そこにはいない婚約者の顔を思い浮かべる。

扉の前でいつでも飛び出せるように構えた状態で待つ。アレが相手なら小さな油断すら死に繋がることを知っているから。一撃の元に致命傷を与えなければ、

まだ気づかれてはいない。アレはさすがと話をしているのに気を取られている。その注意が余所に向けた瞬間が、好機。

「　　ッッ！」

その好機は突然やってきた。下の階から響く轟音と微かな揺れ。彼の仕業と理解。男達の注意が逸れた瞬間、部屋の中に踏みいった入り口近くにいた男を一刀の元に斬り伏せる。次いで、“人外の反射神経”をもって気付き構えた男の喉元に、飛針。伏せることによつて飛針をかわした男の頭を『神速』を発動して踏みつけ、奥でナイフを取り出した三人目に接近し『徹』。ナイフが弾かれる。がら空きになった胴体に袈裟斬り。続いてがら空きになった顎を蹴りあげ昏倒させた。

後ろから、踏み台にした二人目が腕を振るってくるのを『神速』を維持したまま避ける。豪腕には当たらない。常識外の力があるのは既に知っている。

かわしつつ、交差する瞬間、浅くだが傷をつけていく。しかし、すぐに再生が始まる。交差が二桁を過ぎたころ、恭也は部屋の隅に避難していたはずかの側へ後退。ずずかを庇える位置に身を起き油断なく構える。

「…恭也さん！アリサちゃんは」

「無事だ。気絶してはいるが傷は一つもない」

恭也の言葉に涙を浮かべていたはずかはほつと胸を撫で下ろした。



「…人間風情がよくもやつてくれる…！」

血走った眼で男が恭也を睨む。他の二人が意識を失い倒れているのを見てギリリと歯を噛み締めた。

「その人間を使って誘拐を企てた奴の台詞とは思えんな」

「黙れッ！貴様、八つ裂きにしてやる！」

男が床にヒビを入れながら突進。

恭也の後ろにはさすががいる。下手に避けられない以上、迎え撃つのが最善。しかし、純粹な腕力では大幅に負けている。最初の接触で何の傷を負わせれなかつたのが痛い。残る手は再度『神速』を用いての一瞬での決着。けれど、連続での神速使用は多大な不可がかかる。下手をすれば使用後は動けなくなる可能性がある。それは避けたい。しかし、神速以外で対抗する術がもうない。ならば一か八か懸けてみるか、しかし

「ウオオオオオ ツツ！！」

「クッ」

迷う暇は無い。迫る男の雄叫びに触発されるように恭也は一か八か『神速』を使 莫大な気配が身体を突き抜けた。

男もそれに気付き、一瞬動きを止める。その隙に恭也はさすがを抱いて、部屋の壁を斬り砕き部屋の外へ転がるように避難した。

次の瞬間、

『神鳴流奥義』

凜とした声が聴こえると同時に、幾千もの煌めきが発生した。煌めきは縦横無尽にビルを破壊する。捉えきれぬ程の数のそのの一つが、恭也は奏が使った飛ぶ斬撃だと理解しながらも、階段へと走り込み五階に下った。

「 拡散斬光閃」

技の終わり。ガラガラと崩れていく部屋の中心でその奏は刀を下ろした体勢で佇んでいた。既に六階フロアは形もない。細かい破片になって五階フロアに積もっているだけだ。一階なんか比べ物にならないくらい酷い有り様。何をどうしたらここまで出来るのだろうか。未知なる恐怖に身体が震えた。

「 再現、終了」

小さく奏が呟く。その瞬間、恭也が感じていた剣士としての存在感が消え失せた。そこにいるのはいつも通りの、奏の後ろ姿。

「……………日山くん？」

腕の中のすずかが奏を見て呆然としながら呟く。少年が二人に気付き振り向いた。思わず構えた恭也。それに気づかずに奏は空ろな表情で片手を額に持っけいき、

「 やりすぎた……………」

何か後悔していた。

恭也は構えを取ることすら忘れ、呆然と立ち尽くす。はしゃぎすぎた？ あれがはしゃいだ結果？ ビルの一フロア破壊したあれが？ 軽く死にそうになっただけだ。

文句を言いそうになる恭也の目の前で奏は、「ごめんなさいと一度謝り、怪我が無いかを訊いてきた。

「一応、全部、気……じゃなくて衝撃波にしていたから、当たっても酷くて気絶ぐらいで済むと思うんですけど……」

「あ、ああ……大丈夫だ。すぐ階段に逃げたからな、一つも当たってない。死ぬかと思ったけどな」

「すみません！すみません！少し力加減をミスってしまっ……まさか上の階まで巻き込むなんて……」

威力ありすぎだろ奥義……。と青ざめた顔で呟く奏を見て恭也は溜め息を吐く。なんだそれは。まさか初めて使ったのか。この様子を見る限りそうらしいと思い、より深く溜め息。

ビクツとビビりながら奏が聞いてきた。

「あのお……やっぱり不味かったですよね？」

当たり前だと叫びそうになるのを寸前で恭也は堪える。台風が過ぎ去ったかのような瓦礫だらけの光景だが、奏の言葉を信用するなら死傷者は出ていないのだろう。まるで信じれないが。それでも、誰も死なず 殺さずにすずかを助けることが出来た。

腕の中のすずかを見る。キョトンとしている。たぶんまだ現状を理解できていないのだろう。次に奏を見て、ビクビク怯えながら伺うように上目遣いで見る姿に、恭也は小さく笑って奏の頭に手を置いた。

「いいや、良くやった」

キャラが掴めないッ！

誘拐事件は死傷者0、廃ビルの一フロア倒壊という結果で、無事解決した。

一階で気絶した五人に見張り二名は僕が呼んでいた警察に引き取られていき、残りの何名かは何故か月村の関係者という人が引き取っていった。金持ちは何かとあるのだろう。お家騒動とか言っていたし。そういうことには首を突っ込まないのが吉だ。

あ、あと犯人達を捕まえたのは恭也さんが一人で行ったことにしてもらった。流石に本当のことをそのまま言うのは勘弁してもらいたかったからだ。信じてもらえなさそうというのもあったが。

まあ、色々あったがとにかくこれで事件は解決。バニングスの父親のおかげで事情聴取にもいかなくて済むそうなので、気が楽だ。というかバニングス家の権力ってすごいなオイ。警察官が頭下げてるんですけど。

まさか本当にマフィアとかじゃ、と戦慄しながら、頭に包帯を巻いた鮫島さん（車を運転していたバニングス家の執事）から、車の中に置き去りだった買い物袋+翠屋印のシュークリームを僕が受け取っていると、

「カナチャ                    んっ！！」

「へぶっ！」

唐突に抱き締められた。誰に？ 母さんである。

ぎゅっつと力いっぱい、その豊かな胸の内に抱き締められた僕が、酸素を求めて両手をパタパタしていると、今度は唐突に肩を掴まれてグイッと離された。

「カナちゃん怪我してない？ 酷いことされてないよね？ 痛い所

は？ ない？ ほんと？ 我慢しないで言っでいいんだよ？ ああ  
っ、こんなに汚れて。可愛い顔が台無しじゃない」

「え、えっと……母さん？」

母さんはペタペタと僕の身体を触りながら怪我をしてないか調べ  
ていく。その最中にも母さんの言葉は止まらない。最後は僕の顔に  
ついた汚れをハンカチで拭っていく。

「えと、あれ？ ……母さん仕事は」

「早引きさせてもらいました。警察から連絡貰って飛んで来たの。  
本当に心配したんだから」

といっても、警察から連絡来たってことは解決した後ってことだ  
から、心配もなにもないんだと思うけど。

そのことを言おうとすると、また抱き締められた。いつも母さん  
は動きが突然すぎる。少し強く抱き締められて、また息が苦しくな  
った。

ちよつと離れよう。そう思い両手で押し返そうとして、母さんの  
様子に気づいた。少しだけ口許を開けて母さんの好きなようにさせ  
る。

「……ごめんね、母さん。心配かけて」

「……本当によ。母さんにはもうカナちゃんしかいないんだからあ  
まり心配かけさせないで」

「うん。約束する。でもさ、僕は怪我してないしさ、酷い目にもあ  
ってなんかいないから、さ。……だから、泣かないでよ、母さん」

「だ、だつて……カナちゃんがいなくなるかも、つて……思つて……  
無事なカナちゃん見たら……嬉しく、て……！」

「……大げさだなあ、母さんは」

笑いながら母さんを優しく抱き返す。手のひらに柔らかい髪が絡み付く。僕と同じ色素が薄い茶色の髪。親子である証の一つを、丁寧に背中ごと撫でる。

ポツポツと頬に当たる涙は拭わない。必要がない。僕を想って流してくれているんだから、拭ったりなんかしたらバチがあたる。

「だつてえ……わだしはカナちゃん……がないど……！」

「はいはい。……僕はここにいるから。いなくなったりしないから」「うん……！うん……っ！」

ポタポタ、ポタポタ。

優しい雨つてのはこういうのを言っただな、なんて生意気にも考えた。

「……しょうがないな、ほんと涙脆いんだから。ほら、抱き締めてあげるから、いっぱい泣いていいよ」「

「う……うわああ　んっ……！」

子供か、なんて僕の突っ込みは母さんの泣き声にかきけされた。

「……完璧に周りに人がいることを忘れてるな、あれは」

「あはは…」

恭也さんの呆れたと言わんばかりの言葉に、私は苦笑いで答える。私達はまだ事件があった廃ビルの近くにいます。だから、警察の関係者も周囲には大勢。その全員に暖かい目で見られているのに、完璧に二人の世界だ。今はいいとしても、我に帰ったら日山くんは凄く恥ずかしがるだろう。顔中真っ赤に染まった様子が容易に想像出来て、思わず笑ってしまった。

「すずか、恭也、おまたせ」

「お姉ちゃん」

「もういいのか？ 忍」

「うん。彼らの身柄はさくらさんに頼んだから。これで一先ずは安心ってとこかしらね」

お姉ちゃんはそう言って、未だ声を上げて泣いている日山くんのお母さんと日山くんの方を見た。

「…それで、本当なの？ 恭也じゃなくてあの女の子が殆ど解決したって」

「お姉ちゃん。日山くんは男の子だよ？」

「…え？ ほんとに？」

「本人が聞いたらまた拗ねるな」

くくつ、つて恭也さんが意地悪そうに笑うと、お姉ちゃんはやつと信じたみたいで「ああ…だから“くん”なんだ」って呟いた。

「まあ、それはいいとして…で、どうなの？」

「ああ、本当だ。結局、俺が気絶させたのは二人だけ。他の九人は全部、奏くんが一人で倒した」

「はあ……俄には信じられないわね」  
「でも真実だ。すずかちゃんも見ただろ？ 奏くんの力を」

私は曖昧に頷いて、あの時の光景を思い出す。

花びらが舞うように、沢山の銀色の弧が空を裂いていく不思議な光景。縦横無尽に走ってビルの一フロアを壊滅させた常識外の現象。恭也さんの言っているのはそのことだろう。

そう、あれ『も』日山くんの力なんだ。

「本音を言つと、凄まじかった。正直、正面からあの技を使われたら勝てる自信がない」

「……そんなに？」

「人間が台風に挑むようなものだ」

「一応、爆破つてことにしておいたけど、正解だったわね」

日山くんが破壊した六階フロアは、犯人が持ち込んだ爆弾が爆発したつてことにされている。爆発にしては焦げ跡もないから、矛盾があるけど正直に話しても信じてくれるかどうか……絶対に無理だと断言できる。

「それで、これが一番重要なんだけど…彼は信用できる？ 私は話したこともないから、二人の意見に任せるわ」

「私は日山くんを信用するよ。ずっと一緒のクラスだもん」

「それは理由にならないんだけどね……恭也は？」

「…あれを見たら警戒する気も失せる」

呆れた顔で、恭也さんは日山くん達を指差した。



『ほら、母さん鼻かんで』

『うう……チーーンッ!』

『はい、後は涙拭いて……おお、化粧がごっそり取れとる』

『ご、ごっそりって!母さんそんなに厚化粧じゃないもん!』

『もんって……母さん、年考えようよ……』

『あー!駄目だよカナちゃん!女性に年齢の話題振るなんて。デリカシーがないよ、デリカシーが』

『え、実の親にまで聞いちゃいけないものなの、それって』

「……確かにね」

お姉ちゃんは苦笑して「ていうかあの人本当に母親? 若すぎない?」って呟いていた。それを言ったら、なのはちゃんのお母さんもそうだ。今更ながら、何歳なんだろうって気になった。

「あ、やっと周りに気づいたみたいね」

お姉ちゃんの言葉通り、日山くんは自分達が今まで見られていたことに気づいて真っ赤になっています。日山くんのお母さんは気にせずニコニコしているけど、平気なんだろうか。外見はそっくりなのに、判っていたけど中身は違うみたいです。

「こっちに来るわね。恭也、どうする?」

「先に、日山さんに挨拶しておこう。奏くんには明日にでも聞けばいい」

「それもそうね」

日山くんがお母さんの手を引いてこっちに歩いてくるのを、私はどこか暖かい気持ちになりながら見つめた。

「今日は息子を助けていただきまして、本当にありがとうございました」

「そんな畏まらないください。当然のことをしたまですから」  
「でも、助けていただいたことには変わりありません。このお礼は必ずさせていただきます」

「お礼なんて、そんないいですよ。本当に気にしないでください」  
「それに元はと言えば私達の家のゴタゴタに息子さんを巻き込んでしまったので、こちらこそ、すいませんでした」

「いえ、気にしないでください。私は息子が元気でいてくれればそれでいいんです。だから、高町さんには是非お礼を……」  
「いえ、だから……」

「日山くんのお母さんって、急にイメージ変わるね」

「僕が絡んでない時の母さんは、基本礼儀正しいよ。昔はお嬢様だったみたい」

母さんと恭也さん&月村のお姉さんが会話しているのを眺めながら、僕は月村と話をしていた。大人は大人、子供は子供ってね。

「しかし、なんだな……ちょっとこれは予想外だ」

僕の言葉に首を傾げた月村を見ながら思う。なんでこの子怖がらないの？

僕の記憶では、月村は僕がハッスルしすぎて天井所か色々ぶち抜いたのを見ていた筈だ。あれだけの異常な暴力。見たら少しは怖がるのが普通の筈なのに、どうしたことだろう、これは。なんで、こんな少し動けば手が触れそうな程近い位置に彼女はいるのでしょうか。ほんと、理解不能です。バニングスは思わず後ずさる程怖がっていたのに。

そういえば、バニングスはどうなったのかというと、気絶したまま病院に運ばれていった。外傷も無く、ただ気絶しているだけだったが一応検査するらしい。恭也さんも「助けた時には既に気絶していた」としか言っていないから、しょうがない。

閑話休題。少し予想外なことが起こったんで逃避してたんだ。許してほしい。

「あ、そうだ日山くん」  
「ん、なに？」

能力についての質問だろうか。いやまあ、それしかないだろうと思っただけだが、いざとなるとどう誤魔化そうか緊張す

「うん。お願いがあるんだけど……これから日山くんのこと名前で呼んでもいいかな？」

「え？」

え？ 名前？ 質問じゃないの？ というかさつきから予想外過ぎるよ月村。

月村は「だめ？」と首を傾げて上目使いで訊いてきた。すぐ目の前の月村の顔が直視できなくて、僕は顔を背けた。顔が熱い。クソッ、ペースを取り戻せ僕！さっきのシリアスを思い出せばこんなギヤグ空間なんぞ……いや、さっきも意外とギヤグ混じってたな。駄目じゃん、俺。

「別に……好きにすればいいよ」

須崎がツンデレ！と叫んでいるような気がした。

それはバニングスの専売特許だろう、いやいやカナちゃんのツンツンっぷりも中々のものですよゲへへ。脳内の須崎と何故か会話やけにリアルなのが気持ち悪い。ええいつ、失せる変態！

突然頭を振りだした僕を月村は怪訝な表情で見たが、次の瞬間には見惚れるような満面の笑顔を浮かべた。

「うん。それじゃ奏くんって呼ぶね。それで、私のこともすすずかっ  
て呼んでね、奏くん」

「や、それは……今まで通り、月村じゃ」  
「私だけ名前で呼ぶのっておかしいよね。だから、お願い奏くん」

駄目でもなくお願い、か。なんで一々上目使いなんだろ。狙ってやってるようには見えないけど、身長同じぐらいだよね僕たち？

講義の結果は試合開始三秒で僕のKO負け。おかしい、僕はこんなに女の子に耐性が無かったのか。

「……すすずか」

「うん、奏くん！」

なぜだ。なぜこつも距離が近くなっている。君の中で何が起こったんだ月村……すすずか。怖がれよ、自分で言うのもなんだが、色々

と異常だぞ僕は。えへへ、と笑うずすかはどう鼻屑目に見ても可愛かったけど。

「って違うだる僕よ！」

「奏くん？」

可愛かったとか今はいらなんだよ！脈絡ないじゃん！急に明後日の方向に思考が飛んだなオイ！

でも、なんかいつもより何倍も可愛かったんだ。はにかんだ表情とかいつもとどこか違って、心臓がドキドキするけど。なんだこれは。

カナちゃんがニコポされた！再び叫んだ脳内須崎を速攻でデリート。僕も知らない言葉を使うな、脳内須崎。

「ですから俺はお礼はいらないと……」

「けれど、それでは私の気が収まらない……ああ、ではこういってお礼はどうでしょう？」

「いや、だから……」

「しばらく体でお礼すると言っつのは」

「なに言っつてんですか母さん……！」

お礼がどうここの会話から、変なことを言い出した母さんを止める為、僕は赤く染まった顔を隠すように走った。

キャラが掴めないッ！（後書き）

こんな母親、現実にはまずいねえ

## 第二意味不展開（前書き）

一度頭の中を真っ白にしながら読めば大丈夫かと？

## 第二意味不展開

明けて日曜日。

ちようどよく学校が休みだということで、僕は月村家にお呼ばれされていた。用件は十中八九アレだろう。能力の使用。九年間隠し続けていたのに僅か一日で三人……いや、月村のお姉さんを含めて四人か、そんな人数にバレるとは思ひもしなかった。

ちなみに呼び出しは電話にて。連絡網みればそりゃ分かるか、と呆れつつバニングスは大丈夫かと聞いてみると、少し空元気だけど一応は大丈夫、という返答。空元気づてことは僕は会わない方がいいのだろう。恐怖を蒸し返すのもなんだしね。

「おはようございます、恭也さん」

「ああ、おはよう。それじゃ行こうか」

「はい」

翠屋の前で待ち合わせをしていた恭也さんに挨拶をする。恭也さんはいつも通りクールに返答した。

なぜ恭也さんと待ち合わせをしているかというところ、僕が月村家の場所を知らなかったので、道案内を頼んだからだ。ついでということとで快く承諾してくれた。

「昨日は母さんがすみませんでした。母さんは若干……天然なもので」「ああ……あれは本当に驚いた。まさか、翠屋で無償で働くって意味だったとは」

「分からない方が普通です。息子の僕でさえ未だに掴みきれっていませんから」

互いに苦笑しあう。その後、世間話をしながらバス停に。月村家



にはバスを使つた方が早いらしい。結構、遠いんだなとバスを待ちながら待っていると、恭也さんがジーと僕を見ているのに気づいた。

「どうしました？」

「いや…やっぱり普通の少年だなと思つてな」

「……昨日のアレ見てそう言える恭也さんは大物ですよ」

苦笑しながら言うと、恭也さんは「いやそうじゃない」と首を振った。

「昨日のは確かに凄まじかった。しかし、今の君からは昨日感じた…剣気というのだろうか。俺も初めて感じたものだからよくは言えないが、それが感じられないのは確かだ。立ち振舞いも隙だらけだしな。それが不思議に思えたんだ」

「ああ、なるほど」

やっぱり分かる人には分かるものか。なにぶん、今まで能力のことを知っている人なんていなかったから、他人から見たらどう移るかなんて考えたことなかった。

答えを聞いたそうにしている恭也さんに「二度手間は嫌なので」と言い、ちようどよく到着したバスに乗り込む。恭也さんもしようがないかみたいな感じで僕の隣の座席に座った。

「そういえば、君とこういう風に話すのはこれが初めてだな」

「そうですね。いつもは客と店員でしたし。年も離れているので、こういう機会でもなければずっとそのままだったでしょうしね」

「……前から思っていたが、本当に九歳か奏くん」

大人びているとは何度も言われたことあるが、年齢自体を疑われたのは初めてだ。

僕がこういう性格なのは、物心ついた時から九人？分もの『記録』を何気なく視ていたからだ。そのどれもが濃い一生だったせいで、小さい時はよく泣いて母さんを困らせていた。そりゃ、殺し殺されでおまけに救いのない話なんかみたら泣くわ。良くトラウマにならなかったなあ、僕。

けれど、一応は誤魔化しておこうか。『記録』のことは喋るつもりないし。

「父親がいませんでしたから。我儘なんか言える筈ありませんし、こうなるしかなかったんです」

「……そうか」

少しは疑われるかと思っただが、恭也さんは意外にも難しい顔ながらも納得した。

いや、あれは納得した訳じゃないか。なんか別のことを考えている感じ。恭也さん自身に似たような出来事があったのかそうでないのか。まあ、今更撤回なんて出来ないし別にいいか。騙しているの、少し気分は悪いけど。

「……ねえ、恭也さん」

「なんだ」

「金持ちの家って皆こうなのかなあ」

「安心しろ、こんなのはここだけだ」

目の前に広がるのは銀色の軍隊。銀色の銃身。奥に見える豪邸が霞んでみえる程、前方に広がる過剰戦力は存在感がありすぎた。

「なんで自動機銃なんてあるのかな…」

「防犯対策だ。弾丸はゴム弾だから、安心してくれていい」

なにをですか。ゴム弾だからって当たり所悪ければ死ぬでしょうが。

「僕達、ちゃんとインターホン鳴らして、確認取りましたよね。なんで不法侵入者扱いされなきゃいけないんですか」

「たぶん見たかったんだろうな。忍はまだ目にしてないから」

忍つてのがすすずかのお姉さんというのは分かるけど、なにを見たかというんだろうか。自分の恋人巻き込んで。

恭也さんの視線は僕に向いている。目前の脅威にでなく、その奥の月村邸でもなく、僕に。それで、気づく。月村のお姉さんが何を見たいのかを。

「まさか……僕？」

「…すまない。たぶん俺が話したせいだ」

そう言って恭也さんは気まずそうに目をそらした。きっと話しただけが原因じゃないと思う。絶対余計なこと言ったでしょ、恭也さん。

ガチャン、と銃身が動く気配。もう時間はないらしい。溜め息をつく。これ、やるしかないじゃないか。

「……自分の恋人の手綱、しっかり握っておいてくださいよ……」  
「……すまないな奏くん」

あんた諦めてるだろ、と思いつながら、意識を内側に追い込み、『四番』の円盤を選択。炉に火をくべるように、円盤に体の内側にある何かを注いで、回す。

「set・four record/spin start」

能力の発動には決まったキーワードを言わなければならない。これは誰かに教えてもらったとかではなく、人間が呼吸することを生まれながらにするように、能力を意識した瞬間に覚えたことだ。

setは円盤の選択。

spin startは回転を始める合図だ。

「『神鳴流剣士』桜咲 奏」

word master。今の言葉を音にするとこうなる。これも決まりである。こういうのルビって言うんだっけ？ よく分からないけど、僕の力はやっぱりどこか変だ。ちなみに『一番』はchild error。置き去りという意味らしい。なんで英語なんだと思うがドイツ語のもあったりするから、基準が分からない。『二番』がそれだったりするが、『二番』にはあまりいい思い出がないので忘れることにしよう。

「再現」

これはload。取り込むって読み方が正しいと思う。

「……驚いたな。一瞬で別人に変わったようだ。それにさっきの英

語は……」

「それは後にしましょう。今はここを切り抜けなければ」

流石にこの距離だと聴こえてしまうらしい。マズイか？ けれど、あれは能力発動のプロセスだ。外すことは出来ない。

これも纏めてどうにか誤魔化そう、と決意しながら僕は身体中に気を纏う。そして武器がないことに気づいた。無手でもいけるけど、武器があった方がいいよな。相手は技を見たがつてるんだと思うし、僕がそう悩んでいると目前に見覚えのある刀が差し出された。

「小太刀だが、使うか？」

「……ありがたく使わせていただきます」

これどつから出したんだよ、なんて突っ込みはしない。しないったらしない。藪蛇に首を突っ込むなんて真似できるか。

受け取った小太刀を二度振り、感覚を確かめる。神鳴流は武器を選ばないとはよく言ったものだ。すぐに身体が小太刀の間合いを把握した。

さて、ここからどうするか。敵の数は膨大だけど、然程バラけてはいないので技を使えば突破するのはあまり難しいことじゃないだろう。

問題は、それで警戒心を抱かれるか、否か。まあ、さすがと恭也さんは割かし普通に接してくれているので、月村のお姉さんも大丈夫かなと思う。

それに今、技を目立たせそっちに注意が向けば、恭也さんに聴かれたキーワードのことをうやむやにできるかもしれない。

ならば、ここは日頃の鬱憤も兼ねて大技ぶつ放すか。そうと決めたら、すぐに行動に移ろう。

「よし、それじゃデカイの一発いきますので、恭也さんはそこで待

っ  
つていてください。たぶん、それで終わります」

「なに？ 待て奏くん、まさか」

恭也さんの言葉が終わる前に瞬動。門と月村邸との間に、一瞬の間に現れた僕の動きに付いてこれず機銃がワントンポ遅れて僕に照準を合わせる。次の瞬間、全方位にマズルフラッシュが発生する。一斉に迫るゴム弾が当たる瞬間、真上に瞬動。目標を見失った弾丸が土を抉った。なにが安心しろなんですか恭也さん……。あれ、普通に人が死にますよ。

「え？ あれ？ どこにつ？」

スピーカーがどこかにあるのだろうか？ たぶんモニターしているであろう、すずかのお姉さんが機械越しに慌てているのを少しほくそ笑みながら、僕は小太刀を上段に構え、

「神鳴流奥義 拡散斬光閃！」

全力を持って真下に振り下ろした。

線が走る。銀色の弧が空間を埋めつくし、球状に広がっていく。数が多すぎて銀色のドームのようだ。

流星は神鳴流。手加減せずに使えばここまでの威力を出すのか、と感心しながら、技の終わり、余波でひび割れた地面に僕は着陸する。

トンツと足の先が着くのと同時、ガラガラと崩れていく全ての機銃。僕はそれを満足気に眺めた。

「……………」  
「……………」

未だに門の辺りにいた恭也さんは呆然としていた様子だった。一度、見た筈なのになぜ恭也さんまで驚いているのだろうか。

瞬動で恭也さんの側まで移動する。恭也さんの手に小太刀を握らせ、僕は頭を下げた。

「小太刀ありがとうございます。おかげで楽に終わりました」  
「あ、ああ……」

引き釣った笑みをしながら、恭也さんは小太刀を袖に仕舞った。そんな所に隠していたのか。と感心する手前、危ない人だとも思う。僕が言えた義理ではないけど。

「……………恭也」  
「だから言っただろ……………台風だった」  
「そうね……………私が間違ってたわ」

スピーカー越しの恋人通しの会話。それは溜め息がシンクロする程、息が合っていた。

第二意味不展開（後書き）

ごめん。無理ぽ



## 能力一覧（前書き）

とりあえず今現在判明している能力を軽く説明。  
それ以外は分かり易いヒントを書いています。

見る、見ないはアナタの自由です。

## 能力一覧

『一番』

大能力者・日山 奏

世界・『とある魔術の禁書目録』

置き去りと言われる捨て子の内の一人。外見アルビノのあの人に  
実験にてグシャツとされた。身も蓋もない人生。たぶん恋も経験し  
ていない。享年14歳。

能力はテレポート。直接的な殺傷能力は一番低い。

『二番』

闘志に変身する力

世界・

ドイツ語辺りで変換すればいいと思うよ。

『三番』

優秀な改造人間の遺伝子

世界・

タランチュラさんが大好きです。

『四番』

神鳴流剣士・桜咲 奏

世界・どつちかといえば『ネギま』寄り

神鳴流皆伝の腕前な女剣士。実力は青山にも匹敵したそうなのではないそう。せつちゃんの母親という神をも恐れぬ捏造設定。せつちゃんは親に望まれて生まれてきたとかないと、生まれが悲しすぎると思う。神鳴流剣士なのは完璧に興味だけど。享年28歳。戦争にてMIA。

『五番』

存在を喰らう徒の牙。

世界・

人間の敵。王ではありませんせぬ。

『六番』

身体に刻む紋章の術。

世界・

4は失敗だったと思う。やっぱり初代。序盤で頑張ってたドワーフブーツ取るんだ。

『七番』

愛する者を生け贄にした罪人の紋章

世界・

幽霊とか悪魔とかHな契約とか。

『八番』

情報を改変する騎士の脳と剣

世界・

指パッチン。あれはヤバい。

『九番』

竜という最強の肉体と魔力。

世界・

光の人と合体したいです。闇でもいいです。でも土はのーさんき

ゆー。あ、2ですよ？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7326k/>

---

思い付きで書いてみた。(リリカルなのは×多重クロス)

2010年10月11日04時46分発行